

# 二松學舎松茶會報

## 卒業生を送るに当って

—私の二松學舎大学像—



学長 渡辺 和則

二松學舎大学は都市型大学として九段キャンパスで生き抜く途を選択しました。昨年7月に九段3号館が竣工し、平成22年度の入学者から希望者は九段校舎で授業を受けられるようになります。平成25年度を目標として、全学年の教育を九段キャンパスで行う予定です。

学長 渡辺 和則  
約と呼んでいます。九段集約を契機として、卒業生が、二松學舎大学は自分を育んでくれたところという想いを抱くような二松學舎大学にしたいと私は考えています。卒業生にとって母校がそういう存在であれば、大学と松茶会の協力関係は一層緊密なものになると思います。また、卒業生から愛される大学でなければ世間の人々が振り向いてくれるはずはなく、大学の順調な発展も望めません。

私立大学において、評議員の一定数は卒業生から選出されるべきことが、私立学校法(44条1項2号)によって定

められています。二松學舎大学においては、松茶会から評

昭和62年12月1日創刊  
平成22年3月20日発行  
二松學舎松茶会  
〒102-8336 東京都千代田区  
三番町6-16 ☎03(3261)7408  
振替口座 00180-5-160343  
印刷 (株) サンセイ  
〒103-0023 東京都中央区日本橋  
本町4-11-10 ☎03(5614)2515

### 平成22年度ホームカミングデー開催予告

—卒業生〈松茶会員〉懇親会—

主催 二松學舎松茶会・二松學舎大学  
日 平成22年8月1日(日) 10:30~15:30  
会場 大学九段校舎  
会費 無料  
イベント 卒業生・在学生・教職員合同作品展  
期間 平成22年7月26日(月)~8月1日(日)まで(予定)  
会場 九段校舎地下1・2階 展示ホール

松茶会・大学では、第6回ホームカミングデーを九段校舎で開催いたします。併せて合同の作品展も昨年同様に開催します。書・絵画・彫刻・工芸・写真・著書等を展示いたします。

ホームカミングデーには卒業生はどなたでも参加できますが、特に下記の卒業期(卒業後50年、45年、40年、35年、30年、25年、20年、15年、10年、5年を迎える卒業生)の皆様には改めて個別案内いたします。同期生お誘いあわせの上ご参加くださるようご案内いたします。

作品展も6回目を迎えます。卒業生はどなたでも出品できますので日ごろの成果をお寄せください。

#### 文学部

- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 第29回(昭和36年3月)卒業 | 第34回(昭和41年3月)卒業 |
| 第39回(昭和46年3月)卒業 | 第44回(昭和51年3月)卒業 |
| 第49回(昭和56年3月)卒業 | 第54回(昭和61年3月)卒業 |
| 第59回(平成3年3月)卒業  | 第64回(平成8年3月)卒業  |
| 第69回(平成13年3月)卒業 | 第74回(平成18年3月)卒業 |

#### 国際政治経済学部

- |                 |                |
|-----------------|----------------|
| 第2回(平成8年3月)卒業   | 第7回(平成13年3月)卒業 |
| 第12回(平成18年3月)卒業 |                |

ホームカミングデーの参加、作品展出品の希望者は、松茶会事務局までお問い合わせください。折り返し、出品要領等をお送りいたします。

事務局 東京都千代田区三番町6-16 二松學舎松茶会  
電話 03-3261-7408 FAX 03-3261-8914  
ホームカミングデー実行委員会

議員が選出されております。したがって、松茶会は卒業生の親睦団体であると同時に大学の運営基盤を支える有力な後援団体です。これまで、学生募集、就職先の紹介、奨学金の創設、募金活動、ホームカミングデーの開催などにおいて、大学は松茶会の支援を受けております。誠に有

難いことと感謝致しております。それでは、二松學舎大学は自分を育んでくれたところという想いを、卒業生が抱くような大学であるためにはどうすればよいか、ということになります。それに対して私は二つの回答を提示したいと思います。

第一に、二松學舎大学は学生を大事にする大学であるということを、教職員の共通目標として掲げ、その方向で全教職員が努力すること、第二に、その共通目標を実現していくために、学生に対して質の高い教育を提供することに全精力を傾注することです。

質の高い教育は高度な研究があつてこそ実現されるものです。研究は教育を支える土台であり、教育はその上に建つ建物のようなものです。

したがつて、教育を無視した研究や学生の存在を考えない研究は、二松學舎大学においては意味を持ち得ません。

教育施設設備が限られた九段キャンパスで都市型大学として二松學舎大学が発展していくためには、教育研究における独自性を追求するとともに、教育研究のレベル・アツプをはかることによつて、その存在理由を確保すること以外ありません。そのための施策として、教員採用試験の合格に向けた実践的な指導を行う教育支援センターを平成22年度4月に開設します。また現在、教員と職員の代表から

成る大学改革検討会議を設置し、学部・学科の改編と新学科の設置をも視野に入れた改革について検討をお願いしております。

以上、私の考える二松學舎大学像について述べましたが私の考え方の前提は学生を大事にするということにあります。

## 卒業生の皆さんへ

松茶会会長 神津 賢一郎



本年二松學舎大学を卒業される皆さん、四年間の学業を終え、晴れて学士の学位を授与されました。心よりお慶び申し上げます。また、皆さんの卒業を心待ちにしておられたご父母の皆様におかれましては、この経済的不況の中で卒業を迎えたというご苦勞が多く無量な喜びであつたと思ひます。心よりお祝い

す。その一点に力を傾注し、二松學舎大学の教育研究の再構築を図つていきたいと考えています。

卒業生の皆さんには今後の二松學舎大学の発展に期待していただくとともに、ご指導とご鞭撻を賜りますようお願い致します。

申しあげます。

卒業生の皆さんにとつて、自分の人生設計に大切な進路を決める時に、この世界的な不況に遭遇し、就職難で、さぞ大変な思いをされたのではないかと思います。苦難の時代ですが、それにめげず、粘り強く立ち向かつて欲しいと思ひます。

さて、皆さんは、二松學舎大学を卒業すると同時に「松茶会」の一員になります。「松茶」の「茶」は松の根に生ずる「茯苓」。茯苓は松根に生ずる菌類で、疾病を治す漢方

薬です。

本学創立者、三島中洲先生は「本学を卒業した諸子は茯苓となつて、世の弊害を正し治す者となれ。」という意の詩を作られた。そこから、昭和六年、第一期卒業生の同窓会に当時の校長山田準先生が「松茶会」の名をつけられたということである。それ以来、「松茶会」の名称が続いているのです。

どうか、この意を汲んで、これから社会の一員となる皆さんは「世の弊害を正す」気概を持って、活躍されること

を期待致します。

ところで、松茶会は北は北海道から南は沖縄に至るまで全国都道府県に支部があり、皆さんの先輩が活躍しております。自分の出身県でなく他県に赴任されてもその県の支部には是非顔を見せて下さい。心より歓迎いたします。

支部総会の案内などありましたら、出席して友好を深めていただければと思います。卒業生同士は同じ建学の精神のもとに、勉学にいそしんだ仲間です。その絆を大切にしたいものと思ひます。

## 平成21年度支部総会報告

### ◇北海道支部

支部長 奥村 悠二郎

本年は太陽の日差しが少なく、曇りがちの夏模様でしたが、大過なく収穫の晩秋を迎えることができました。自然に感謝するとともに、日頃から北海道支部を支えてくれる皆様に感謝を申し上げます。

8月29日に「平成21年度支部総会」を開催いたしましたので紙面を借りて報告いたします。

支部総会出席の返信葉書には部活や父兄会及び出張等、現役の皆様の活動内容を伺わせるものや、諸先輩の方々からは体調の不良等、それぞれの近況が記されていきました。道内に在住する同窓生の活躍

を嬉しく思うと共に、支部活動の一体感を感じているところとです。

今年の総会は本部からの参加がなく残念でしたが、20年度決算並びに21年度予算を審議頂き、満場一致で承認を頂きました。今年の目標も、各地区の分会活動の促進と、総会等への参加を呼びかけることを重点目標とすることが決まりました。その後は「松茶会」の全国各支部の活動報告と大学の新校舎の話題等で盛り上がり、今年の総会を無事に終えることができました。また「道南分会」と「道東分会」の総会参加をお願いし、散会となりました。

平成21年度北海道支部総会開催日 平成21年8月29日 (札幌市内)

◆参加者

- 中 紀 義 (31期)
- 奥村 悠二郎 (36期)
- 山崎 郁 紀 (36期)
- 増井 義 昭 (39期)
- 安部 初 雄 (42期)
- 岡野 誠一郎 (45期)
- 佐賀 敦 司 (49期)

- 花 木 弘 (49期)
- 吉 野 泰 正 (55期)
- 若 松 顕 仁 (56期)
- 永 田 哲 之 (65期)

道南分会の活動報告

平成21年10月3日「道南分会」の総会を函館市内「根ほっけ」で開催しました。函館市内に在住する支部会員が集い、一年間の無事と現況情報

が酒の肴となり、楽しい宴を過ごすことができました。今回の特別ゲストは、函館市内に在住する作家「林家夢助」氏門下の講師「荒到夢形(こうとうむけい)」こと本名荒川到氏(51期)の参加

でした。聞くところでは教職の道を変更し「講師釈」として新たな旅立ちを進んでいるとのこととです。

参加者からは「奥方の了解は？」「飯が食えるのか」とか、驚きの質問が次々と飛ぶ始末。

「奥さんは了解したし、飯の心配も不思議と食える状況にある」との返答。

路を変更する蛮勇に大きな拍手と大きな声援を送ります。これからの活躍を祈念すると共に、北海道支部も後援者の一員として助力を惜しむものではありません。

会の開催に尽力された吉川さん、ありがとうございます。道南分会の皆様、今後ともよろしく願います。

◆参加者

- 南部 知 正 (37期)
- 田 島 基 義 (38期)
- 開 原 正 信 (39期)
- 若 狭 一 也 (39期)
- 荒 到 夢 形 こと
- 荒 川 到 (51期)
- 吉 野 泰 正 (55期)
- 吉 川 肇 (59期)
- 奥 村 悠 二 郎 (36期)
- 山 崎 郁 紀 (36期)

以上で支部総会と道南分会の総会報告といたします。

皆様のご助力を力として、さらに活発な支部活動を展開

したいと考えています。この上に、現在2名の「政経」同窓会員を中心として国際政経学部と同窓生に対して参加を訴えていきます。

道東分会の活動報告

事務局長 山崎 郁紀

平成21年度の道東分会総会は10月17日、釧路市末広町の「あぶり屋」で2年ぶりに開催されました。当日は10月と

しては比較的暖かな日中で、用意していたコートも必要ありませんでした。道東分会は北見で開催されることが多かったのですが、このところ北見方面の会員数が減ったため、道東の中心都市である釧路で行われるようになりまし

た。かつて炭鉱や北洋漁業の基地として栄え、人口24万人を数えた釧路も、駅前通りはデパートも閉鎖され、シャッター

1の下りた店が目立ち、昼間の人通りもまばらで寂しい街に感じられました。夜ともなれば、どこから人が湧いて出てきたのかと思うほど飲食店街はにぎわっていました。

さて、今回の総会には久しぶりに根室から伊藤さん夫妻も参加され、楽しい会になりました。

伊藤ご夫妻は根室で東京ドーム50個分の広さに150頭の牛を飼う酪農家で、牧場内には30頭程の野生エゾ鹿の群れも住み着いているとのこととです。根室には、周辺を合わせた8名程の会員がいるので根室だけで会合を開いてみる

こととです。また当日は、書道の大家である米川先輩が、書道科教師をして安部氏に呼びかけて総会参加のために2人で色紙を用意して下さり、「あみだくじ」の結果、伊藤さんと私が頂くことになりました。

総会ではそれぞれの学生時代の話や最近の話などで盛り上がり、二次会は米川先輩のなじみの店に全員で流れ、来年の再会を約しました。

今回の参加者は、札幌からの私を除いても、北見・根室・帯広と、釧路まではそれぞれ200キロ近く離れているので、道東分会総会を開催するのは本当に大変です。川谷分会長はじめ幹事の皆さん、

ありがとうございました。

◆参加者

- 米川 智義 (33期・釧路)
- 伊藤 正彦 (34期・根室)
- 伊藤久美子 (34期・根室)
- 川谷 文雄 (39期・北見)
- 澤向 崇 (39期・帯広)
- 五十嵐 猛 (56期・釧路)
- 安部 孝 (57期・釧路)
- 山崎 郁紀 (36期・札幌)

支部会費・通信費カンパの納入状況(平成21年8月1日以降)

※一般年会費(三千元)

- 奥村 悠二郎 (36期)
- 南部 知正 (37期)
- 田島 基義 (38期)
- 増井 義昭 (39期)
- 安部 初雄 (42期)
- 森田 松雄 (43期)
- 佐賀 敦司 (49期)
- 菅野 敦子 (51期)
- 五十嵐 猛 (56期)
- 若松 顕仁 (56期)
- 松田 佳代 (59期)
- 近藤 知美 (59期)

※通信費カンパ

- 南部 知正 (37期)

- 田島 基義 (38期)
- 増井 義昭 (39期)
- 安部 初雄 (42期)
- 近藤 知美 (59期)

皆さん、ありがとうございました!!

◇秋田県支部

支部長 三浦 基

平成21年度秋田県支部総会は、8月16日(日)午後5時から秋田駅前のホテルメトロポリタン秋田を会場に開催されました。

例年高校教員の参加が多いことから夏季休業中の開催となっているのですが、この日は各地の送り盆行事と重なり出席者は8名でした。

前年度に引き続き出席していただいている秋田大学教育文化学部教授石川三佐男氏から「帰国報告」と題して、中国の大学からの招聘を受け4月6日から53日間に及ぶ学術講演等の報告がありました。楚辞学の合作工作や浙江大文学人文学院、蘇州大学文学院、上海大学文学院、清華大学人

文社会科学学院、北京語言大学文学院での学術講演会、さらには北京の三大学の学位論文審査会陪席の様子、中国の学生、大学院生の反応など中国の文化論を交えて語っていただきました。

他にも現在研究していることについてのお話があり、来年度の支部総会にあわせて石川教授の公開講座開催を企画できないものかと思案しています。

来年度は8月8日(日)秋田市または公開講座開催地の予定です。

◆平成21年度秋田県支部総会出席者

- 野口 養吉 (専門17期)
- 高橋 三男 (大学34期)
- 関谷都志子 (大学35期)
- 石川三佐男 (大学40期)
- 三浦 基 (支部長・大学41期)
- 近藤 和裕 (支部長・大学41期)
- (副支部長・大学41期)
- 永井しおり (幹事・大学54期)
- 工藤 正隆 (幹事・大学62期)

◇群馬県支部

近藤 和史 (73期)

松苓会に出席して

今回の平成二十一年度群馬県支部総会、新年会にて初めて松苓会に出席させていただきましたが、これが私の中の二松學舎大学を単なる「出身校」から「母校」へと変える出来事になりました。

正直に言って、二松學舎大学については特にこれと言った思い入れも持たず、この時も知り合いに会えればという程度の軽い気持ちでの初参加でした。

しかし当日会場でお会いした方々と接し、そんな軽い気持ちには吹き飛ばされてしまいました。参加された方々は二松學舎大学に深い思い入れや愛着を持ち、かつそれを語る事ができるので私は圧倒されました。自分を恥ずかしくさえ思いました。

私は卒業して以来、一度も二松學舎大学を訪れたことがなく、大学の現状についても会報を流し読みするだけでし

た。大学は単なる通過点、卒業したらそれっきり。そんな卒業生だったからです。

しかし会場で出会えた方々との交流と大地先生の熱のこもったご講演が私を変えました。

二松學舎大学は単なる出身校ではない母校なのだ。この母校のために何かしなくてはならないと思えるようになったのです。

「卒業生に見放されるような学校に未来はない。」大地先生のご講演で一番印象的だったこの言葉。以前の私のような卒業生ばかりになれば学校だけでなく、これからの卒業生たちにとっても悲劇です。

人生の大きな節目となる場所が単なる最終学歴で終わってしまふことの悲しさは私自身が経験したことです。それを少しでも防ぐことができるようにこれを機に、微力ながらお役に立てればと思います。

本当にありがとうございました。



◆千葉県支部

支部長 辻 将一

第2回千葉県支部

香取・海匝・山武地区会の開催  
平成21年11月7日(土) 14  
時から、旭市図書館第一会議  
室において、第2回香取・海  
匝・山武地区地区会が7名の  
出席者により開催された。

当日の議題は次の通り。

- 一、開式の辞
- 二、千葉県支部長挨拶(辻支  
部長)
- 三、香取・海匝・山武地区長  
挨拶(前田副支部長・地  
区長)
- 四、出席者の紹介
- 五、大学の現状報告
- 六、卒業生の交流(講演)  
那智栄美子氏―雑感  
小原伊知郎氏―大学時代  
の思い出
- 七、閉式の辞

会終了後、懇親会を開催、  
意見の交換を行った。

◆出席者(敬称略)  
支部長(千葉地区長)

辻 将一 大学―45

副支部長(香取・海匝・山武地区長)

前田 康晴 大学―49

副支部長(船橋地区長)

簡野 泉 大学―54

事務局長(東葛地区長)

小林 憲二 大学―38

事務局次長(長生・夷隅地区長)

山口 朗 大学―62

那智栄美子 大学―40

小原伊知郎 大学―56

◆神奈川県支部

支部長 廣田 克己

平成22年神奈川県支部 賀詞  
交歓会

平成22年1月17日(日)、  
12時30分より小田急・相鉄大  
和駅近くにある中華料理の北  
京飯店で開催された。

会は司会を兼ねた保田完次  
副支部長の開会のことばの後、  
廣田克己支部長の挨拶に移っ  
た。その中で、県内に教員の  
会を立ち上げたことに触れら  
れ、会員増にぜひ結び付けた  
いと決意を述べられた。

来賓として、松苓会副会長  
松田存氏、東京支部顧問神立  
春樹氏からご挨拶をいただいた

た。そこでは、本学が九段校  
舎で4年間学べることになっ  
た効果からか、推薦入試の応  
募者が予想以上に多く、うれ  
しい悲鳴をあげているという  
報告もあり、一氣に場が喜び  
に包まれた。そして、井上興  
正支部顧問の乾杯のご発声に  
唱和し、和やかに歓談となっ  
た。

歓談ののち、各参加者のご  
挨拶、近況報告があった。そ  
の中では、本支部の立ち上げ  
に尽力され、また、長い間役  
員、顧問として支部を支えて  
こられた17回生豊田常三郎氏  
の哀悼の報告があり、一同氏へ  
の哀悼の思いに肅然たる面持  
ちであった。菅氏に引き続い



ての計報だけに、やるせなさ  
が募る。(合掌)

そんな重苦しい雰囲気をは  
ち破るかのような、東京支部  
長木村正雄氏のお元気な姿や  
初めての参加となる岡野桜氏  
の姿が目をつけた。岡野氏は  
松田副会長の教え子というこ  
とで、その薫陶よろしく大和  
市内の柏木学園高校で教鞭を  
とり、日々奮闘している由、  
今後の活躍に期待したい。ま  
た、支部会員としての活動の  
確約もあり、うれしい限りで  
ある。

最後に、二松学舎大学の知  
名度アップをどう図つたら  
いか、ということが組上にあ  
たり、大いに議論が盛り上が  
ったので、紹介したい。

一つの案として廣田支部長  
から「箱根駅伝」を目指すの  
はどうか、と提案があった。  
口角泡を飛ばす(大げさに表  
現すれば)意見交換の中、ど  
うも次のように集約されそう  
だ。

二松学舎は宣伝が下手(と  
いうより広報を重視していな  
い)、二松学舎の知名度を上  
げるためには、どうすればい  
いか、一つの手段として「箱

根駅伝」を目指すのは有効で  
はないか、ぜひ大学当局は考  
えてほしい、ということであ  
る。

ただし、他に有効な方法が  
あればそれでも構わない。腕  
を拱いて動かないということ  
だけは避けてほしい。これ  
が箱根駅伝全コースの殆どを  
占める本支部の願いである。  
かくて、参加できなかつた  
方からの近況報告に目を通し  
たり、楽しいひとときを過ご  
した賀詞交歓会も3時頃、記  
念撮影でお開きとなった。

賀詞交歓会参加者は次のと  
おりです。(敬称略)

- ◆出席者
- 廣田 克己(修5回)
- 井上 興正(27回)
- 松田 存正(26回)
- 木村 正雄(25回)
- 神立 春樹(特別)
- 平野 光治(40回)
- 保田 完次(41回)
- 中川 俊一郎(修10回)
- 小林 孝彰(38回)
- 保田 陽子(39回)
- 片桐 佐和子(57回)
- 岡野 桜(71回)

# 九州探訪 (二題)

松田 存 (26期・院修)

今年(平成二十一年)、後半になって二回宛て九州へ出掛けた。その一つは八月二十二日(土)に開催された松茶会鹿児島県支部の総会・懇親会で、岡元支部長をはじめ二十名の卒業生が集まり、盛会であった。

そのとき話した能「玉井」と鹿児島とのかかわりについて帰京後、折から求められていた能楽関係誌(『橘香』十月号)の巻頭言に別掲の稿を草した。

二度目は十月二十二日(木)夕方、大分城址公園で催された新能で、ゼミの卒業生夫妻と会って欲談する機会を得たことだった。

当日の演目は野村万斎の狂言「蝸牛」と桜間右陣による新作能「宗麟」で、その時のパンフレットに後記の一文を草した。

## 古代のロマン、能「玉井」への想い

『古事記』上巻にみえる彦火々出見尊の項を素材に脚色されている小次郎信光(一四三五〜一五一六)の作品である。よく子供の絵本などに説かれていた海幸彦、山幸彦の説話である。

ワキは彦火々出見尊(山幸彦)、兄(海幸彦)の釣針を失った山幸彦(弟)が老翁の導きで海神の宮へ赴き、海神の女二人と婚い、釣針をとり返して帰途につく件りである。

この場を近代の絵画として描いたのが青木繁(一八八二〜一九一一)の「わだつみのいるこの宮」である。背のすわりとした女性二人が、樹上に腰を下ろす男(彦火々出見尊)を見上げている構図で、記念切手の図柄としてもとりあげられたことがある。

筆者は、かねてこの絵は、あの能「玉井」の平面的な舞

台を立体的に構想したものではと考えている。この絵は、かつて上野は池之端で催された勸業博覧会に出品、本人として入賞疑いなしと信じていたところ、三等末席にて失望落膽、九州各地を放浪のすえ福岡の松浦病院で僅か二十八歳でその生涯を閉じている。

この作品については夏目漱石(一八六七〜一九一六)も『それから』の中で「いつかの展覧会に青木という人が海の底に立っている背の高い女を描いた。代助は多くの出品のうちであれだけが好い気持ちにできていると思った。」と描写している。

いずれにしても能「玉井」にかかわる旧跡は、南九州一円に点在している。枚聞神社をはじめ鹿児島神宮・鶴戸神宮・霧島神宮・青島神社しかり、祭神は全て彦火々出見尊であり、鹿児島には「玉ノ井」とする旧跡が伝えられており興味深い。

能「玉井」の上演頻度はきわめて低いが、かの能を観る度に古代のロマンと、青木繁の絵画「わだつみのいるこの宮」に想いを馳せることしばしばである。

## 大友「宗麟」プロフィール

現在はクロージングしてしまっただが、東京は新宿西口に赤レンガという店があった。ビルの地下一階で昼間は喫茶、夜はレストランバーのようなスタイルで、ファドの弾き語り聴かせる瀟灑な店であった。

そのオーナー夫人と親しく話し合うようになり、櫻間會のポルトガル公演のさい、かの遣欧使節が足を運んだサン・ロケ教会博物館でのシンポジウムに参画したことなどを話すと、大友宗麟の子孫だということ、より深い縁を感じ、宗麟と遣欧使節に関係する本を差し上げたことがある。

さてこのたび桜間右陣師が新作に挑んだ大友「宗麟」は享祿三年(一五三〇)、豊後ノ国大友義鑑(よしあき)の子として生まれ、幼名は塩法師丸、諱は義鎮(よししげ)、剃髪後宗麟と号している。法名は瑞峰院・休庵。

ところで豊後ノ国と云えばかの東条英機(一八八四〜一九四八)夫人(かつ子)の先

祖が平清経というのも興味を惹くところである。

さて宗麟は、戦国大名として天文十九年(一五五〇)、父義鑑の後を継ぎ、十九カ条の政道条目を制定、領域の拡大を進めては北九州六カ国(筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後)を支配するまでに雄飛している。そして居城の臼杵や府内の良港を利用しては明船やポルトガル船の来航を仰いで対外貿易の中心的主宰者でもあった。

ともに宣教師等の来朝も多く、これを保護するとともに自らも受洗してフランシスコとも称している。そして天正十年(一五八二)には耶蘇会バリニヤノの勧めで他のキリシタン大名(大村純忠、有馬晴信)と称される一連の大名と組して遣欧使節(伊東マンショ、千々岩ミゲル、中浦ジュリアン、原マルチノ)を派遣するに至っている。

しかし受洗後にして島津氏と日向の耳川の合戦で大敗、滅亡するに至る。それからわずか五年後の天正十五年(一五八七)、五十八歳で歿している。(名誉教授)

# 秀葉会(38回生)の集い

浅香 孝子(38期)

小春日和という言葉が心に響く頃になりました。

二松學舎大学を母校とする私共三十八回生は、昭和四十五年三月卒業、以来四十年が経過いたしました。

八月二日、秀葉会が一同に会することは久しぶりな事であり、会場は在学中を懐かしみ鮎忠本家神楽坂店でありました。当時ゼミで利用した人々が多い場所とうかがった



ておりますので、坂を登る道中は昔を思い出し会話がはずみ到着いたしました。

この日は石川忠久先生の「三島中洲の人と詩について」の講演と懇親会が開催された二松學舎大学ホームカミングデーでありました。秀葉会会員は招待回数年にあたり、この日にあわせての同期会でありました。

新校舎が落成し十三階ラウンジで懇親会が開催され、皇居・千鳥ヶ淵が眼下に広がるこの一等地に東洋の文化を尊び漢学塾としてスタートし、今日の発展に至った三島中洲翁の偉大さを更に感じた次第である。

「当大学は小さな老舗である」とご挨拶いただきましたが、的確な表現であると思われました。

さて同期会でありませんが、過去何回かは恩師のご臨席をいただいておりますが29名の卒業生のみ参加となりま



した。久しぶりに会えば「ヤア、ヤア」と感激し複雑怪奇な社会の波にもまれ懐古趣味の会だけとは言い切れないものがありました。

懐かしさとか友情を通り越した人生の方向性が感じられ有意義なものでした。旧友が六十の還暦を過ぎてても壮年時代、大いに意を強くした次第です。

何十年過ぎても「おいお前」で昔に帰って話しあい、そして幼な顔にもどって時を過ごす同期会は、たしかに若返りの奇跡の場なのであります。生活報告、近況報告もお互い

に、いろいろな意味で参考になり人間のつなりの貴重さを知らされました。秀葉会には悪人はいない。なぜなら、漢文を学んだ人には必ずや論語の文章が出てきて、人間の道徳心が確立していると思うのです。良い同期会でありました。

◆出席者(敬称略)  
浅香 孝子・阿部 良一  
阿部 洋子・石塚 法子

## 二松學舎松苓会奨学生として

文学部中国文学科四年 竹内 彩乃

卒業式まで2ヵ月をきった今、私は無事、二松學舎松苓会奨学生としてその晴れの日を迎えようとしています。級友たちと共に最後の学生生活を全うすることができ、その喜びをかみ締めながらこうして今を過ごしているのも、ひとえに松苓会の皆様方のお力添えによるものと心より感謝申し上げます。

私には年の離れた弟が3人おり、もとより苦しい家計状

- 伊藤 慶子・伊藤 淑子
- 大牟田 幾代・小野田 真弓
- 金子 広志・紙屋 正彰
- 河南 良平・木村 行幸
- 黒瀬 孝志郎・小谷 章公
- 小林 公雄・小林 憲二
- 酒井 淳吉・高橋 章子
- 田原 迫俊朗・富田 百代
- 永井 陵次・成田 修一
- 濱野 文夫・廣田 克己
- 細川 喜美江・松浦 順子
- 宮吉 妙子・望月 昇
- 和田 勉

況の中、大学へ進学するためにはその一切の費用を自身で工面することが必須条件でした。進学はあきらめ、高等学校卒業後すぐに就職しようと考へたこともありましたが、「教員になりたい」という強い希望を捨てきれず、夢を叶えるためこの二松學舎の門をくぐったのが約4年前のことです。

以来、私は日本学生支援機構のご支援と自身のアルバイト



ト代をもって、忙しく苦しいながらもこれまで充実した学生生活を送ることができました。

ところが、学生生活最後の1年を迎え、教育実習に教員採用試験と長期に渡りアルバイトができない状況が続いた結果、学費や通学費、教材費等の出費で預金も底をつき、このままでは最後の学費納入が不可能という事態に陥ってしまったのです。

「とにかく働こう！」と奮起したものの、不景気の折、長期での勤務を約束できない4年次生はアルバイトとしても歓迎されず、まとまった収入を得られないまま9月を迎え、あつという間に半ばを過ぎました。

父の転職、加えて弟の授業料減免援助もなくなり、家の経済状況は依然厳しく、家庭からの援助は到底望めるはずもなく途方にくれていた。そんな時に奨学生募集の掲示が目に入り、続けるような思いで

面接の当日はたくさんの方々を前に緊張し、お伝えしたかったことの半分も口に出せませんでした。言葉の中からも気持ちの汲み取って下さった先生方、また、

入を得られないまま9月を迎え、あつという間に半ばを過ぎました。父の転職、加えて弟の授業料減免援助もなくなり、家の経済状況は依然厳しく、家庭からの援助は到底望めるはずもなく途方にくれていた。そんな時に奨学生募集の掲示が目に入り、続けるような思いで

### 一 二松學舎松苓會課外活動助成

第21回全日本学生テコンドー選手権大会

個人マツソギ女子 + 57 kg 優勝

亀井 祐子

(国文学科三年生)

第94回書教展

文部科学大臣奨励賞

上田 真愛

(中国文学科三年生)

親身になって相談のつて下さった授業の方にも感謝の気持ちでいっぱいです。そして何より、授与式を経

た今、頂いた証書を見つめていると、この学び舎を先に巣立っていかれた多くの先輩方が私を支えて下さったのだと実感でき、感慨無量の気持ちになります。

この度ご支援賜った多くの方々にあつく御礼申し上げますと同時に、このご恩を忘れず二松學舎の卒業生、松苓會の一員としての誇りをもって邁進したいです。本当に、本当にありがとうございます。

第14回全日本高校・大学書道展・優秀賞

成澤 真璃生

(中国文学科四年生)

第五回世界跆拳道選手権大会  
女子展開競技部門優勝

山寺 由記

(国文学科四年生)

### 「テコンドーを始めて」

文学部国文学科三年 亀井 祐子

私は大学に入学し、ITFテコンドー会に入部しました。テコンドーには普段使わない筋肉を使う、特殊な動きが多くあり、どうやって自分の体を使っているのかわからない事が多く、戸惑いの連続でした。そんな私に何度も根気強く、優しく、時には厳しく、先輩方は教えて下さいました。先輩の教えと、同輩との練習によって今の私があるのだと思います。一、二年を経て、私は副主将となり、同輩と共に、自分の練習だけでなく、後輩の指導に全力を尽くしてきました。そして、現役最後の全日本学生テコンドー大会に出場し、個人マツソギで優勝、女子団体マツソギで準優勝という成績を収めることができました。団体戦では、先輩、同輩、後輩と、三代で出場し、憧れの先輩、今まで一緒に頑張ってきた同輩、これから部の中心となる後輩と一丸となって大会に望むことができたので、成績以上に良い経験、思い出になりました。

私たちにテコンドーというものを教えて下さった方々、今回団体をバックアップして下さった松苓會の方々に感謝をすると共に、これからも二松學舎の名を背負って、より一層の活躍をしていきたいと思っています。

### 書道展に入賞して

文学部中国文学科四年 成澤 真璃生

昨年の松苓會助成金授与式で先輩方からの激励のお言葉や皆様のご支援のおかげをもちまして、今年も第十四回全日本高校・大学書道展入賞をいただくことができました。本当に感謝感激いたしております。



ます。有難うございました。全日本高校・大学書道展は十四回目の今回が過去最高の応募数一二五〇一点だったそうです。書道に熱中する全国の学生の中での受賞は本当に嬉しい限りです。読売書法展は一九八四年から始まった歴史のある書道展で、第二十六回の今回は公募と役員合わせで二八四八一点という全国の書道展を代表する展覧会です。この受賞と入選にしばらくは、ただただ嬉しいばかりの毎日でしたが、皆様からのお祝いと激励のお言葉をいただき、喜びと同時に責任の重さを強く感じています。

おかげさまで、この春で二松學舎大学を卒業します。大学生生活の四年間の中心は幼い頃から続けてきた書道の学習でした。二松學舎大学の学生として個人で色々な書道展に出品をする等と活動をしてきました。書道部には通学などの関係で入部することは出来ませんが、大学の書道専攻の授業やゼミのカリキュラムの中で専門的な技術、知識を得ることが出来ました。二松學舎大学で書道を学ぶの

は本当に良い環境だったと思います。この素晴らしい環境を作ってくださった先輩方を始め、指導をしてくださった諸先生方や全国から二松學舎大学の書道を学びに来た仲間達には本当に感謝しております。

### 第五回世界躰道選手権大会 女子展開競技部門に優勝して

文学部国文学科四年 山寺 由記

昨年、平成二十一年八月に広島で開催された『第五回世界躰道選手権大会』に日本代表の一員として参加し、団体種目である女子展開競技で優勝しました。周囲の方々のご支援のおかげでこの様な結果を取ることができ感謝しています。

私は大学に入学し、躰道を始めました。今まで辛いことや怪我に苦しんだこともありましたが、学生最後の年に最高の結果を出すことができ四年間続けてきてよかったと思います。躰道は他の武道と比べまだ

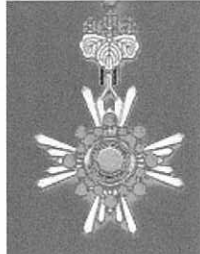
第二十七回読売書法展も、もう準備をする時期になりました。先輩方のご期待を胸に刻み、卒業しても二松學舎大学の卒業生として日々精進していきたいと思えます。今後ともご支援くださいますようお願い申し上げます。

歴史は浅く、知名度も低い武道です。今回、お祝いのお言葉を頂戴し大変嬉しく思いましたが、それ以上に躰道がこのような活動をしていることを紹介できる機会を頂き大変うれしく思います。今回を最後とせず、これからも二松學舎で学んだ学生として恥ずかしくない活躍ができるよう努力していきたいと思えます。



### 叙勲 受章者

- 佐藤 保 (元理事長、顧問) 瑞宝重光章
- 大谷 光男 (名誉教授) 瑞宝中綬章
- 青山 忠一 (名誉教授) 瑞宝中綬章
- 松本 寧至 (名誉教授) 瑞宝中綬章



### 三島中洲文献目録

(平成10年以降)

- 最後の儒者―三島中洲― 三島正明 明德出版社 平成10年9月
- 幕末・明治期の儒学思想の変遷(第4節 三島中洲―

折衷学より義利合一論へ― 山田芳則 思文閣出版 平成10年10月

三島中洲の学芸とその生涯 戸川芳郎編 雄山閣出版 平成11年9月

三島中洲詩全釈 第一巻 三島中洲著 石川 忠久編 二松學舎 平成19年10月

山田方谷から三島中洲へ 松川 健二 明德出版社 平成20年4月

三島中洲の書・資料集 中島学区郷土を学ぶ会編 中島学区郷土を学ぶ会 平成21年3月

山田方谷の陽明学と教育理念の展開(第七章 三島中洲の陽明学と二松學舎) 倉田和四生 明德出版社 平成21年8月

○漢詩人大正天皇—その風雅の心  
石川 忠久  
大修館書店  
平成21年12月

○岳堂詩話(12)  
大正天皇と三島中洲  
石川 忠久 学鑑98—3  
丸善  
平成13年3月

○三島中洲初期の詩「問津稿」について 石川 忠久  
漢文学解釈と研究 第2輯  
漢文学研究会(上智大学)  
平成11年11月

○資料  
山田方谷と三島中洲  
井上 明大  
大阪女子学園短期大学紀要  
43号  
大阪女子学園短期大学  
平成11年12月

○講演  
三島中洲の周辺—郷里、高梁、一族等を中心として  
三島 正明 斯文108号  
斯文会  
平成12年3月

○岳堂詩話(11)  
三島中洲の「霞浦遊藻」  
石川 忠久 学鑑98—2  
丸善  
平成13年2月

○貴州省の日本人教習と陽明祠の三島中洲詩碑—附三島中洲と黎庶昌  
石田 肇  
駒沢史学第64号 駒沢史学会  
平成17年2月

○並木栗水による三島中洲批判  
岡野 康幸

○三島中洲の詩「鎮西観風詩録」を中心に  
石川 忠久  
国文学解釈と鑑賞73—10  
至文堂  
平成20年10月

○三島中洲の詩業—大正天皇の師傳  
石川 忠久  
文学10—3  
岩波書店 平成21年5月

○三島中洲の「論学三百絶」  
高 文漢  
東洋研究第147号  
大東文化大学東洋研究所  
平成15年1月

○三島中洲をめぐる漢学者群像  
松田 存  
知性と創造第1号  
日中人文社会科学学会  
平成22年2月

○三島中洲の詩業—大正天皇の師傳  
石川 忠久  
文学10—3  
岩波書店 平成21年5月

○三島中洲の「論学三百絶」  
高 文漢  
東洋研究第147号  
大東文化大学東洋研究所  
平成15年1月

○二松學舎大学陽明学(二松學舎大学東アジア総合研究所陽明学研究部発行)掲載 三島中洲関係論文及び三島中洲研究1—4 (二松學舎大学21世紀COEプログラム事務局発行)の論文についてはスペースの関係上、掲載しませ

んでした。

### 寄贈図書紹介

平成二十一年度の寄贈図書は次の通りです。

○「孔子の一生と論語」新装版  
緑川佑介著  
明治書院  
(一五〇〇円・税別)

○「紫式部日記関係史料解説」  
岸元史明著  
国文学研究所  
(三〇〇〇円)

○「紫式部日記傍註全検証」  
岸元史明著  
国文学研究所  
(三〇〇〇円)

○「二〇〇〇の古典二〇〇〇の言葉」  
小林日出夫著  
明德出版社  
(二一〇〇円)

○「日本のこころ二〇〇〇のことば」  
小林日出夫著  
明德出版社  
(二一〇〇円)

○「陽明学二〇〇〇のことば」小林日出夫著  
明德出版社  
(二一〇〇円)

○「泣いても笑っても人生」  
西慶蔵著  
西日本新聞開発センター  
(一二三八円+税)

○「紫式部日記関係史料解説」  
岸元史明著  
国文学研究所  
(三〇〇〇円)

○「泣いても笑っても人生」  
西慶蔵著  
西日本新聞開発センター  
(一二三八円+税)

○「泣いても笑っても人生」  
西慶蔵著  
西日本新聞開発センター  
(一二三八円+税)

### 計報

伊藤 淑平  
(元学長、名誉教授)  
平成21年12月22日  
伊藤 富雄  
(松苓会京都支部長)  
平成21年10月17日  
豊田 常三郎  
(松苓会元事務局長)  
平成21年10月13日

